

遽撤退を命ぜられたため、このような戦闘が続けられたのだと、戦後知ったわけです。

私も、軍隊での苦労は覚悟していましたし、訓練も行軍も作戦も、どんなに苦しくても耐え抜いてきたつもりです。しかし、一番の心を痛めたのは兄弟同様の戦友が多数戦没したことです。私たちも、よくぞ生きて還れたと今でも思っております。生も死も運だとはいうものの、隣の友が戦死傷する体験は一生忘れることができませんし、我々の使命第一は戦没者の慰霊だと、その灯を絶やさず、また我々の労苦を含め後世に伝えなければならぬと痛感しております。

## 近衛兵の意気地

### 南支翁英作戦と慰霊

富山県 藤森 良

―藤森さんは、近衛師団で南支の作戦に参加されたのですが、その中で印象に残ったことをお話下さい。

い。

私は大正六年六月二十日生まれ、昭和十二年十二月一日、近衛歩兵第二連隊第三大隊に現役兵として入営しました。高岡市では五名が近衛に入ったのですが、当時は思想的にも厳しく、いろいろ調査があったのですが、部落の人たちの推薦があったからでしょう。

昭和十四年十一月二十一日、近衛混成旅団（桜田兵团）の動員が完結しました。近衛師団というと皇居、禁闕護衛が主任務とされていたのですが、支那事変で、十三年十月頃には南支の広東、中支の漢口を攻略するのに蔣政府は徹底抗戦をと見え、事変はますます拡大してきました。

近衛師団においても「戦で錬えて来なければ宮城勤務は出来ないのだから、一年半をもって戦地へ派遣して下さい」と、陛下に言上したという。そのため混成旅団の動員下令となつて、富士の裾野での天覧演習を終わって戦地へ出発した。ですからわれわれ兵隊の意気も大変高くなっていました。

近衛混成旅団に参加した私の軍隊手帳の主要な事項

を読んで、戦闘から仏印進駐までの連隊の行動の概略が判ると思います。

昭和十四年十二月一日宇品出帆、十二月八日広東省

黄埔上陸、九日西村着。

十二月二十日から十五年一月四日翁英作戦（広東北

方翁源・英徳）参加、一月十日蚊虫山上陸、十一

日から二十日欽寧作戦（欽県・南寧―第五師団救

援）参加、二十一日から二月九日賓陽会戦（大勝

利）十日より南寧西南津村警備、

三月一日から四月六日江南作戦参加、

四月七日から五月二十六日那陳墟付近警備、二十七

日から六月十七日第二次西路作戦、十八日から七

月十五日江南地区警備、十六日から九月十五日大

高峯隘警備、

九月一日印度支那派遣軍臨時編成（北部仏印進駐準

備）二十日欽県出発、二十一日蚊虫山出発、二十

六日仏印フクサ上陸、二十七日ドーソン港着、

十月八日海防着、十日バクニン（ハノイ北東三十キ

ロ）着、同地警備、

十六年一月四日補充交代帰還（長期勤務者）のため  
海防出発、十七日宇品上陸、十八日東部第三部隊  
帰還、二十二日現役満期除隊。

これが現役中の履歴ですが、十ヵ月余で大東亜戦勃発  
となり、十二月二十五日臨時召集、東部四十八部隊（富  
山）に入隊伍長任官後補充兵教育に従事、十八年九月  
二十九日召集解除軍曹。二十年四月二十八日臨時召集、  
東海第九十四部隊に応召、翌日解除ということで、い  
よいよこれからの決戦のお役にたきたいというのに、  
「何故解除か」と、人事係に捻じ込んだところ「アメ  
ーバー赤痢菌保有者だから」という。「おおめおめ家へ  
帰れぬから証明書を出せ」と申し入れ、これがその証  
明書です。（証明書を示す）

―南支の諸作戦、仏印進駐まで、幾多の苦勞があつ  
たと思いますが、一番苦勞されたのはどの戦闘で  
したか。

それは我々にとつての初陣であり、犠牲者を多くだ  
した翁英作戦（昭和十四年十二月二十四日から十五年  
一月四日）です。

その中でも富士山型（三角山）高地山頂の激戦でしょう。近兵第二連隊第三大隊の一個中隊が全滅に瀕した戦です。何しろ初めての戦いで、近衛の名譽ということもあり、他の師団を置き去りにして、錐揉み作戦で前進し過ぎて、敵のワナにかかった。目的地まで追撃、追撃で行った。

我々の部隊は今まで、実際の戦闘には参加していないのだから、「負けたことを知らぬ」と持ち上げられていたので有頂天になっていた。他部隊が十キロ進むところを四十五キロも進んでしまった。

第十一中隊は全滅だと報告され、内地で我々の中隊にいた将校（私等の同年兵）で幹候だった人が大本營に勤務していたので、海軍機で偵察をしてもらったら、距離が遠すぎて中々発見されなかったが四十五キロの地点でようやく見つかったという。

当時の戦闘の思い出を、私が記録した文がありますので一寸読んでみます。

「那香墟より那線へと戦闘隊形を整え、先ず富士山型高地へ向い前進、と同時に敵の猛射を受ける。高地

へ取り着くには約三十メートルぐらいの田圃の中を横切り前進せねばならなかった。

第二小隊第三分隊は「各個前進早駆け」で全員無事通過。その間一人が前進する間に必ず五・六発のチェッコ機銃弾が前後にピシピシと飛来する。この中を一挙に横切らねばならない。

今度は第四分隊の番だ。先ず斎藤庄一分隊長が出る。「やられた」と半分ぐらい駆け抜けた所で一発太腿に命中する。でも分隊長はよく片足で駆け抜け、山裾へ着いてバッタリ倒れる。この重傷でよくも必死にたどり着いたものと、この神技ならぬ駆け足ぶりには敬服する。

続いて我等第四分隊員が敵弾猛射の中を早駆け各個前進にて全員無事に山裾に辿り着いた。直ちに分隊長の傷の手当てをして前進。しばらくして分隊長の出血がどうしても止まらぬとこのことで、早速衛生兵に見てもらったら、大きな傷口は弾丸の出口で、この傷口のみ手当てをしていたら、弾の入り口の傷口が小さいので見落としていたため、そこから出血していたのと。

即ち弾丸の入り口は小さく、出口が大きいことが判り、完全手当てを終えた。弾丸は旋回しているのので、出口には肉を巻き取るように出て行くので傷が大きくなることを確認した。

続いて富士山型山頂陣地の奪取の死闘と墓場の台地、五本松の台地へと攻撃前進する。」

私が記録をした理由は、何人もの横におった戦友が出血しながら死んだ。小隊長は私等同年兵の幹部候補生だったが、軍刀を抜いて敵の夜襲の時、胸を射たれて戦死した。分隊長も同年兵だったが、責任観念が非常に強いので、弾が腿に当たっても向こう岸まで駆け抜けた。普通なら倒れてしまうのに、分隊長としての任務と部下を思う気力がそうさせた。精神力だ、このようなことを後々まで残そうと思ったからでした。

その後、欽寧作戦では友軍の師団を救援し、次の賓陽会戦では大勝利をおさめることが出来ました。敵の数は四十万ともいわれていたが、物凄しい戦果を挙げ、戦車も鹵獲したり、こてんこてんにやった。防弾チョッキなど無しでも、「死なぬ」という信念であったので

恐れるものなし」でありました。だから、信念とは恐ろしいものです。

このようにして第十一中隊には多くの犠牲を出したわけで、前村喜三郎中隊長は「私の身代わりに部下が死んだので、自分のこれからなすべきことは戦友の墓参りしかない」と言っておられた。第十一中隊の戦没者八十余柱のことを思い、自分の仕事（材木商）を子息に委せ、自費で「中隊戦誌―近衛歩兵第二連隊第十一中隊の戦歴」を出版し、無償で我々に配布された。これは一寸やれないことを、全部やってくれた偉い人でした。

前村元中隊長から、軍人精神を叩き込まれながら、お互いに慰め合い「心を入れかえて悪意にとらず、良い方にとって感謝せい、これから社会にどう尽くすか、これからお互いに覚悟することだ。我々はだんだん齢をとって来て、健康の秘訣はどうするか」など言っていた。今年には隊長の七回忌を終わってしまったけれど、中隊の会は今年も第十五回の会をやりました。

―前村隊長の精神というか、信念というのが今も藤

森さんたち元隊員の心に生きていくということですが、戦没者慰霊がその根源となっていると思います。その点についてお話をして下さい。

私が生涯忘れることの出来ないことが数々あります。

その一は、昭和十六年一月、仏印から内地帰還の途につく時の「中隊長訓示」であります。

「帰還者諸子は動員下令以来、中隊の中核として南支各作戦に或いは仏印進駐に共に中隊長を核心として生死を共にし、あらゆる辛苦を共にして今日に至ったのであるが、今ここに諸子は内地帰還の命に依り、戦線半ばにして決別するのは、誠に愛惜の情に耐えない。

然し諸子の多くは既に、現役四年間苦節に耐え、各戦闘に於て赫々たる武勲を建てたる事は、中隊長以下中隊全員の等しく感謝する処、輸送の途中に於ても自愛し、帰還の後も特に身体の保健に留意し、銃後に於ても良民となり、また再び召に応ずれば、近衛兵たるの誇りを以て国家に尽くされん事を切に

望んでやまない。

また再会の日もあるかと思う。切に自愛せられん事を。内地帰還誠に御芽出度う」

私ら帰還者は在隊者一同の盛んな万歳の歓声に送られ十一月、北寧城を後に帰還の途につき、一月十日海防港から「宝永丸」に乗船、中島軍曹以下三十四名が宇品港へ上陸、生還の喜びを体験しました。

その二は、昭和四十一年十一月十九日、靖国神社々務所前に集合した時のこと、仏印で戦友とお別れしてより二十余年、第一回前村（中隊長）会総会の案内状を頂き、何はともあれ参加した。長い年月の空間を経ての再会は、大島居の坂下から集まって来る戦友の姿、「たしか○○だろう？」思いは当時に甦えるが、然し名前が思い出せる人、出せない人。「浦島太郎さん」のように白髪を戴いている姿、武運長久生き永らえた喜び、抱き合って祝福した笑顔は百万ドルに値しました。

この時、参加者の申合せにより靖国神社で慰霊祭を行い「今は亡き護国の戦友に対して生き残った我等の

せめての義務と心得、三年毎に総会をする」ことでした。

その後、その都度、前村中隊長殿は本殿において、山海の珍味をお供え、祭文を謹読し、靖国の英霊にあたかも意志が届くがごとく聞こえる。共に野戦にて戦った我等は万感胸に迫って、感涙が流れ落ちて止まらなかつたことであります。

その三は、次のごとき昭和五十三年十一月五日、奉納された祭文であります。

〔祭文〕

時、靖国の銀杏並木は錦繡を装い、神苑の菊花薫って、秋蘭の今日、戦友五度相集まつて社頭に頷けば、神域の四辺は清浄にて森蔽を極め、幽玄の靈気は惻々として吾等の胸に迫るを覚えます

旧近衛歩兵第二連隊第十一中隊

陸軍歩兵中尉 井田 今男 殿

外 八十五柱

の英魂に対し奉り、心から敬慕の心情を以て慰霊の微意を捧げます。

顧みれば今から約四十年の昔、即ち昭和十四年の秋、日支事変に際して近衛混成旅団の下、兄等は吾等と共に血盟の中隊を編成して大陸への征途につきました。

爾来幾多の大作戦に参加して各地に転戦し、特に欽寧公路を確保する江南作戦には那香に進攻して数昼夜に亙る死闘を繰返して、遂に兄等十数名の尊き散華を出して悲痛の決別をしたのを初めとして、以後の作戦戦闘に或いは疫病に冒されることよって逐次兄等を戦列から損失致しました。部隊は一度北部仏印より内地に帰還して銚を収めました。さらに戦局は大東亜戦争に拡大するに伴って部隊は変わりましたが、兄等は二度、三度奇烈を極める戦線に赴いて、遂に八十有余名の血盟の戦友を亡って、永遠に生あつて再会することを断たれましたことは、吾等断腸の思いであり、誠に痛恨に堪えない悲しみでありました。

前後八年に及ぶ戦争は国土の荒廢と屈辱のうちに終戦を迎えて既に三十三年の春秋を経ました。現在

日本の人口のうち戦争の惨禍や兄等殉国の至誠を知らぬ国民が半ばを越えて居りますが、吾等には当時の想い出が深く脳裡に刻まれて生涯忘れることは出来ません。

祖国日本の今は経済大国に成長し物質文明の恩恵に浴して、国民は文明開花を謳歌する経済繁栄の世代を迎えました。これ等も総て兄等殉国の犠牲に負うところ詢に大であることを日本民族として肝に銘すべきであります。

想えば一時の経済繁栄に陶醉して、専ら利己本位に走る現世相に対して、兄等がかつて祖国の危機存亡の秋にあたり、青春の若き血潮を国家に捧げて、遠く異国の戦野に征き、想像もし得ない困苦欠乏と悪疫瘴癘に堪えながら、熾烈な敵火の下、身を挺して攻守に任じて尊い生命を散らし悠久の大義に殉じました至誠に較べますと、誠に隔世の感が致し、悲憤と慷慨を覚えすには居られません。

「物が栄えて心亡ぶ」とは正に現在の日本を象徴する言葉であります。

然し吾等は神州の不滅を信じて疑いません。神州の不滅は道義の高揚を図り、物と心の両面に調和のとれた発展を企むことにあります。そして道義の高揚は国家の為に殉ぜられた人々を崇敬し、感謝することが根源であると思ひます。

吾等はこの深く思いを致して、兄等の加護により生かされている自らに感謝すると共に、兄等殉国の大義を承け継ぎ、至誠と功績を子々孫々に伝え、微力とは言え勇気を持って国民道義の発揚に全力を注ぎ、祖国の興隆に尽くすことが兄等英魂を慰める道であると固く信ずるものであります。

終わりに臨んで、つたない歌を献じて兄等英魂への饒けと致します。

殉国の戦友 悠久の大至誠

永遠に伝えて 国に尽さむ

嗚呼、靖国の戦友、希くは吾等が微衷を享け給え。

以上

昭和五十三年一月五日

旧近衛歩兵第二連隊第十一中隊

近 歩 二 ・ 前 村 会

代表 元中隊長 前村 喜三郎

私たちは、この祭文に記された隊長の精神、志を継がねばと、会を続けております。この精神で日本の国を何とか建て代えなければならぬと堅く信じて実行しています。

その四は、先に申しました。中隊戦誌により前村隊長の思いやりの夢の一端が実現され、その中に、我が第二小隊第四分隊長齋藤庄一殿が、大腿部に弾を受けながら、軍人精神充実した、責任旺盛なる神業ともいえる場面の実況を記した私の資料が掲載されたことでもあります。